

音読

俳句のリズムと言葉を味わおう
俳句音読プリントの学習の手引き

年

名前

俳句の音読の手引き 1

音読で、俳句に親しみましょう

俳句（はいく）とは、五・七・五の三句十七音から成るものです。この短い三句に、季節を表す季語を入れて自然の情景をつたい、作者の思いを表現しています。季節や風情、歌に込めた思いなどを思いうかべたり、俳句がもつ、リズムを感じ取ったりしながら読みましょう。

俳句の表現の持ちようを知り、情景を思いうかべて、音読に生かしましょう。



形式

・五（上の句）・七（中の句）・五（下の句）十七音のリズムで成り立ちます。

古池や

かわず飛びこむ

水の音

（小林一茶）

・字余り、字足らず

十七音より多くなことを字余り、少なくなことを字足らずと言います。

すずめの子

そのけそのけ

お馬が通る

（小林一茶）字余り

季語……季節を表す言葉を入れて、内容や背景を表し、詩情を高めています。

閑かさや

岩にしみ入る

蝉の声

（松尾芭蕉）

季語は蝉

季節は夏

夏、静かな山寺で、蝉の声が岩にしみ入るように聞こえている情景がうかびます。

切れ字……作者の感動を表したり、一句の調子を整えたりしています。

「や」「かな」「けり」「なり」「ぞ」「か」などが多く使われます。

夏草や

兵どもが

夢の跡

（松尾芭蕉）

今となつては武士たちの夢はあとかたもなく消え去ってしまった。ただ一面に夏草が、しげっているだけだということを、詩情豊かにのべています。

上の句だけを見て、中の句と下の句を暗唱し、俳句の大まかな内容を言いましょう。

夏草や
五月雨
閑かさ

持っている
シートで句を
かくしてね。



「夏草や 兵（つわもの）どもが 夢の跡」
ここ（今の岩手県）は、昔、源義経とその家臣たちが
戦った場所ですが、今となつては兵たちの夢は消え去り、
ただ夏草が、しげっているという意味です。

音読

俳句のリズムと言葉を味わおう
俳句音読プリントの学習の手引き

年

名前

俳句の音読と暗唱の手引き 2

プリントの俳句の季語を見つけましょう



音読プリントの「俳句1」には春をよんだものを、「俳句2」には夏、「俳句3」は秋、「俳句4」は冬をそれぞれによんだものをのせています。それぞれの句の季語を見つけてみましょう。
季語は、情景を思いえがく手がかりとなります。

春をよんだ俳句

雪とけて 村いっぱいの 子どもかな

梅一輪 一輪ほどの あたたかさ

赤い櫓 白い櫓と 落ちにけり

古池や **蛙**飛びこむ 水の音

菜の花や 月は東に 日は西に

春を表す主な季語

かげろう・おぼろ月・ひばり・よもぎ・花見・
山吹・梅・うぐいす・はまぐり・春雨・柳

秋をよんだ俳句

柿食へば 鐘が鳴るなり 法隆寺

朝顔に つるべ取られて もらひ水

秋深き 隣は何を する人ぞ

桐一葉 日当たりながら 落ちにけり

名月や 池をめぐりて 夜もすがら

秋を表す主な季語

星月夜・夜長・すいか・ひぐらし・紅葉・菊
天の川・ぶどう・稲妻・稲刈り・花火・虫

夏をよんだ俳句

五月雨を 集めて早し 最上川

閑かさや 岩にしみ入る **蝉の声**

夏草や 兵どもが 夢の跡

金亀虫 なげうつ闇の 深さかな

五月雨や 大河を前に 家二軒

夏を表す主な季語

麦の秋・夕立・梅雨・新緑・風かおる・田植え
行水・ほととぎす・蛭・青田・金魚売り・虹

冬をよんだ俳句

いくたびも **雪**の深さを 尋ねけり

いざ子ども 走りありかん **玉霰**

うまさうな **雪**がふうはり ふうはりと

斧入れて 香におどろくや **冬木立**

大根引き 大根で道を 教へけり

冬を表す主な季語

木枯らし・霜・ねぎ・みかん・こたつ・七五三
初雪・炭火・たき火・枯葉・北風・雪遊び

音読

俳句のリズムを感じ取りながら
音読や暗唱をしましょう①

年

名前

俳句1（春をよんだ俳句）

俳句（はいく）とは五・七・五の十七音から成るものです。季節や風情、歌にこめた思いなどを思い浮かべたり、俳句がもつリズムを感じ取ったりしながら読みましょう。

こばやしいつさ

雪とけて 村いっぱいの 子どもかな （小林一茶）

冬の長い間ずっと家の中にいた子どもたちが、春をむかえ、雪とけとともに、待ちかねていたかのよう
に外へ飛び出した。春の明るい日差しを浴びて、村の中はどこも子どもたちでいっぱいだ。

うめいちりん

はつとりらんせつ

梅一輪 一輪ほどの あたたかさ（服部風雪）

早春、庭の梅が一輪さいた、その一輪に、わずかながらあたたかくなってきていると、春の訪れを感じ
る。

つばき

かわひがしへきことう

赤い椿 白い椿と 落ちにけり （河東碧梧桐）

紅白の二本の椿（つばき）の木から、ぽとり、ぽとりと落ちた椿の花。それぞれの木をかくむよ
うにして、地面に落ちている。

ふるいけ

かわず

まつおばしやう

古池や 蛙飛びこむ 水の音 （松尾芭蕉）

古池にいと、一ぴきのかえるが池に飛びこんだ。あたりはひっそり静まりかえっているの
で、その小さい水音さえ、聞き取れる。それほど、深い静けさがある。

な

よ さ ぶ そ ん

菜の花や 月は東に 日は西に （与謝蕪村）

辺り一面にさく菜の花畑に、一日がくれてゆくようとしている。東の地平には、月が上り始め、
西の空には太陽がしずもつとしている。

読んだ回数 （。で囲む）	
11	1
12	2
13	3
14	4
15	5
16	6
17	7
18	8
19	9
20	10

	よい姿勢	すらすら読む	俳句の暗唱	意味が言える
私の評価 （ひょうか）	（ ）			
先生の評価 （せんしんのひょうか）	（ ）			

（ ） ともよい 。 よい もうじつ（ ）

音読

俳句のリズムを感じ取りながら
音読や暗唱をしましょう ②

年

名前

俳句2 (夏をよんだ俳句)

俳句 (はいく) とは五・七・五の十七音から成るものです。季節や風情、

歌にこめた思いなどを思いうかべたり、俳句がもつリズムを感じ取ったりしながら読みましょう。

さみだれ

もがみがわ

五月雨を 集めて早し 最上川 (松尾芭蕉)

毎日ふり続く五月雨の雨水は、最上川をぞう水させ、大きな音を立て、いきおいよく流れている。

しづ

せみ

閑かさや 岩にしみ入る 蝉の声 (松尾芭蕉)

夏のさかりのころ、ひっそりとした静けさの中で、ただ、せみの声だけが、岩にしみこむように聞こえ、いつそう静けさが感じられる。

なつくさ

つわもの

ゆめ

あと

夏草や 兵どもが 夢の跡 (松尾芭蕉)

奥州平泉 (おうしゅうひらいずみ／今の岩手県) の館 (やかた)、ここは昔、源義経 (みなもと) のよしつね) とそのかしんのぶしたちが戦った場所である。時はたち、今となつてはぶしたちのゆめはあとかたもなく消え去ってしまった。ただ、一面に夏草がしげっているだけである。

こがねむし

やみ

たかはまきよし

金亀虫 なげうつ闇の 深さかな (高浜虚子)

夏の夜、家の中に飛び込んだ一ぴきのこがね虫を、えんがわから外に放り投げたら、こがね虫は深いやみの中へと吸いこまれていった。こんなに深々とした闇が、身近にあったのだ。

たいが

いえにけん

よさぶそん

五月雨や 大河を前に 家二軒 (与謝蕪村)

しとしととふり続く五月雨のために大河は水かさをまし、激しいいきおいで流れている。はげしい流れの大河を前に、岸にはたよりなさそうな家がただ二軒、心細げに建っている。

読んだ数

(○で囲む)

11	1
12	2
13	3
14	4
15	5
16	6
17	7
18	8
19	9
20	10

私の評価

(. . .)

よい姿勢

すらすら読む

俳句の暗唱

意味が言える

先生の評価

(. . .)

(とてもよい

。よい

もう少し)

音読

俳句のリズムを感じ取りながら
音読や暗唱をしましょう③

年

名前

俳句3 (秋をよんだ俳句)

俳句 (はいく) とは五・七・五の十七音から成るものです。

季節や風情、歌にこめた思いなどを思い浮かべたり、俳句がもつリズムを感じ取ったりしながら読みましょう。

かきくえ

かね

ほうりゅうじ

まさおかしき

柿食へば

鐘が鳴るなり

法隆寺

(正岡子規)

法隆寺の茶店 (ちやみせ) で休んでいた。

名物の柿を食べていると、法隆寺の鐘が静かに鳴り

ひびいてきた。

あさがお

朝顔に

つるべ取られて

もらひ水

(加賀千代女)

朝早く、井戸に水をくみに来てみると、朝顔のつるがつるべ (井戸の水をくむためのおけ) に

からんで伸びている。つるを切ってしまうのはかわいそうで、となりの家に水をもらいに行った。

となり

秋深き

隣は何を

する人ぞ

(松尾芭蕉)

秋も深まってきた。ひっそりとしている隣の人は、私と同じようにさびしい思いをしているのだ

ろうか。ひっそりと物音も立たないが、何をしているのだろう。

きりひとは

たかはまきよし

桐一葉

日当たりながら

落ちにけり

(高浜虚子)

秋の静けさの中、明るい日当たりのよい場所で、桐 (きり) の葉がまい、日の光を受けながら

ひらひらと落ちていった。

めいげつ

よ

名月や

池をめぐりて

夜もすがら

(松尾芭蕉)

中秋 (ちゅうしゅう) の名月の夜、美しい月をうつす池の辺りを散歩して、このすばらしい風景

を楽しんでいたが、ふと気がつくと夜通し歩いてしまっていたことだ。



読んだ回数 (○で囲む)	
11	1
12	2
13	3
14	4
15	5
16	6
17	7
18	8
19	9
20	10

	よい姿勢	すらすら読む	俳句の暗唱	意味が言える
私の評価 (ひょうか)	()	()	()	()
先生の評価 (せんせい)	()	()	()	()

(とてもよい)

よい

もう少し

音読

俳句のリズムを感じ取りながら
音読や暗唱をしましょう④

年

名前

俳句4（冬をよんだ俳句）

俳句（はいく）とは五・七・五の十七音から成るものです。季節や風情ふぜい、歌にこめた思いなどを思い浮かべたり、俳句がもつリズムを感じ取ったりしながら読みましょう。

いくたびも 雪の深さを 尋ねけり たず（正岡子規）

雪は、いったいどのくらい積もったのだろう。自分は病（やまい）にふせて起き上がれないので、何度も家の人に雪がどれくらい積もったのかをたずねたことだ。

いざ子ども 走りありかん 玉霰 たまあられ（松尾芭蕉）

さあ、子どもたち。外に出て走ろう。玉のような霰（あられ）がふつてきているぞ。

うまさうな 雪がふうはり ふうはりと（小林一茶）

手にとって食べたなら、いかにもおいしいそうな雪が、空からまい下りてくる。ふんわりやわらかそうに、ふうわり、ふうわりと。

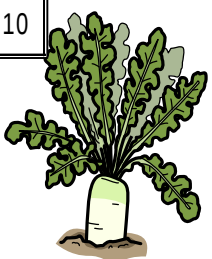
おの 斧入れて 香におどろくや 冬木立 ふゆこだち よさぶそん（与謝蕪村）

かれ木のようになった冬木立の中、一本の木を切りたおそうと、おのをいきおいよく入れたら、思いがけなく新せんな木の香りがただよった。

だいこん

大根引き 大根で道を 教へけり え（小林一茶）

農民が畑で大根を引きぬいていたところ、そばを通った人に道をたずねられて、今、引きぬいた大根で方角を指し示しながら道を教えた。



読んだ回数 （○で囲む）	
11	1
12	2
13	3
14	4
15	5
16	6
17	7
18	8
19	9
20	10

	よい姿勢	すらすら読む	俳句の暗唱	意味が言える
私の評価 ひょうか （ ）				
先生の評価 せんせい （ ）				

（ ） とてもよい 。 よい もう少し（ ）